古本系紫式部集付載「日記歌」をめぐって

――紫式部日記首欠説存疑――

安藤重和

一

古本系紫式部集巻末付載の所謂「日記歌」に関し、小沢正夫氏は半世紀前に次の如く述べられた。[1]

日記歌は最初独立した歌集であつたのが、或時期に異本式部集（安藤云、古本系紫式部集に同じ）の巻末に附加されたのではなく、最初から異本式部集の附録として編まれたとも考へられるのである。即ち紫式部の家の集を編纂しようとした後人が、異本式部集と式部日記とを手にして、異本式部集に漏れてゐる日記の歌を「集」の巻尾に増補したのではないだろうか。

これを受けて池田亀鑑氏は「学苑」一五三号誌上で小沢説に全面的賛意を表され、[2] 秋山虔氏も「この考え方はもっとも合理的に『日記歌』を説明するものであるとともに、日記の首欠説を強化するものである」と、日本古典文学大系『紫式部日記』の解説において、高く評価された。[3] 以来、現在に至っても猶小沢説に対する評価は高く、現存紫式部日記首欠説に反対する萩谷朴氏[4]・南波浩氏[5]・原田敦子氏[6]らでさえ、「日記歌」の原拠が「日記」であるという点においては小沢説を肯定され、現存日記首欠・非首欠の論争は、現存日記冒頭以前の時点にかかわる記事が書かれていた「日記」が、現存日記と一体の「日記」であったか別の「日記」であったかという点に限定されて来た感がある。このように高い評価を受け続けている小沢説に対し、「日記歌」冒頭五首の原拠を「日記」ではなく今は散逸した「古本家集」であると主張された岡一男氏の御説[7]はその後の石村正二氏の反論[8]もあって多くの支持を得るには到っていない。岡説に対する評価は「要するに岡説必ずしも説得性をもたないのである」という秋山虔氏の御言葉によって代表されているように思う。

私も「日記歌」が古本系紫式部集の補遺として付載されたのではないかと小沢氏が言われる点については少くとも現在のところ全くその通りであろうと思っているし、「日記歌」十七首中の第六首目から第十六首目までの部分の原拠が現存紫式部日記であるという点についても、小沢説を待つまでもなく、自明の

事として全く疑念を抱いていない。又、第十七首目の歌の原拠は後拾遺和歌集春上であるという通説にも異議はない。

問題は、現存日記に見られない歌を載せている「日記歌」の冒頭五首の部分の原拠を何に求めるかに存する。その部分の原拠を現存日記の首欠以前の姿に求められた小沢氏の論拠は、「日記歌」という語がこれら十七首の歌群の冒頭に記されていることの他、次の如きお考えによる。

日記歌の歌で現存の日記に見えるものが明かに日記から抄出されたと考へられる以上、日記に見えない例の土御門殿の法華三十講の五首の歌ももとは日記にあつたと考へられないだろうか。

しかし、この類推は危険性を含むと言えよう。「日記歌の歌で現存の日記に見えるものが明かに日記から抄出されたと考へられる」という事実は、「日記に見えない例の土御門殿の法華三十講の五首の歌ももとは日記にあつた」という事をいささかも保証しない。又、十七首の歌群冒頭に「日記歌」と記されている点についても、少くとも十七首目の歌の原拠は紫式部日記ではあるまいと考えられる以上、万全な根拠とも言い難いと思われる。「日記歌」という標題のもとに集められている歌の全てが「紫式部日記」から抄出されたわけではないことになるからである。又、「日記歌」という標題の意味が、「紫式部日記から抄出した歌」の意に限定できるか否かも問題である。

以下、「日記歌」冒頭五首を中心に考察を進めてみたい。

二

小沢説においては、後拾遺和歌集から採られたと見られる第十七番目の歌を除く「日記歌」十六首が一括して捉えられている。一括して捉えてよいものならば小沢説は自明の如くに成立してしまう。しかし、現存紫式部日記を原拠としていることの明らかな第六首目から第十六首目までと、それ以前の冒頭部五首とは等質な詞書様式たり得ているのであろうか。

このように発想する時、真先に気になるのは紫式部以外の人によって詠まれた歌の作者名表記の形式である。第四首目の詞書には後人の手が加わっている（後述）と見られるのでこれを別として、今、第三首目に注目しよう。

おほやけごとにいひまぎらはすを　大納言君

(三)すめる池のそこまでてらすかゞり火にまばゆきまでも憂きわが身かな(9)

後人がこの歌の作者を「大納言君」と推定することは、定家本紫式部集等を用いても、不可能なので、この部分は紫式部の筆のままと考えてよかろうが、ここで作者名が歌の直前部に記されている事に気を付けよう。何故なら、このような記し方は「日記歌」第六首目以降には見られないからである。第六首目以降には、紫式部以外の作による歌は四首（(八)、(十)、(十三)、(十五)）あるが、各歌の作者名が詞書のどこに登場しているかを見るとよい。

(八)　小少将君の、文をこせたまへる……

(十一) (前歌の詞書の中に) 大納言君のよる〳〵……

(十二) 源氏物がたりおまへにあるを、殿御覧じて、れいのすゞろごとども……

(十三) わたどのにねたる夜、戸をたたく人ありときけど……

これは、或る歌の詠作者を明示しようという書式ではない。従って、我々は或る歌の作者を知る為には詞書部分の文脈を探らねばならないこととなる。現存紫式部日記を見ても或る歌の直前部に詠作者が明示されている例はない。現存紫式部日記においては、歌に密着させられるのは歌の成立当時の状況なのであり、歌の作者さえその状況の構成要素の一つとして歌の前後の文の中に位置付けられているに過ぎない。

さて、今、目を紫式部集[10]に転じて見ると、詠作者を詞書中に包摂してしまっている例が多いものの、歌の直前部に詠作者が明示されている例を次の如く見出すことができる。

(37) 返し、人

(73) 内裏にくひなの鳴くを七八日の夕月夜に、小少将の君

(91) たまさかに返りごとしたりける人の後にまたも書かざりけるに、おとこ

(101) (略) 少将の君を夜な〳〵会ひつつ語らふを聞きて、隣の中将

とするならば、「日記歌」第三首目の詞書はむしろ歌集的であるとも言えそうであり、「日記歌」冒頭五首の原拠をにわかに現存紫式部日記の首欠以前の姿に求めてしまうことには問題が残りそうである。

三

先ず、「日記歌」(一)〜(三)番を検討する。

三十講の五巻五月五日なり。けふしもあたりつらむ提婆品をおもふに、あし仙よりもこの殿の御ためにや木のみもひろひおかせけむ、とおもひやられて

(一) たへなりやけふはさ月の五日とていつゝのまきにあへるみのりも

いけの水の、たゞこのしたにかゞり火にみあかしのひかりあひて、ひるよりもさやかなるを見、おもふことすくなくばをかしうもありぬべきをりかな、とかたはしうち思ひめぐらすにも、まずぞ涙ぐまれける

(二) かゞり火のかげもさわがぬ池水にいく千代すまむのりのひかりぞ

おほやけごとにいひまぎらはすを、大納言君

(三) すめる池のそこまでてらすかゞり火にまばゆきまでも憂きわが身かな

法花三十講の中心をなす「五巻の日」が五月五日に行われたのは寛弘五年のことである。寛弘五年の法花三十講は、四月二十三日から五月二十二日まで行われているが、この間一日一座ずつの講義がなされているのに五月五日だけは二座なされている事に注意しよう。

その理由を藤原道長は御堂関白記寛弘五年五月五日条で

講行二座。是レ今日為二捧物一也[11]

と語っている。法花三十講においては、「捧物」は法花経巻第五の中の最初の経典たる「提婆達多品」の講ぜられる際に行われる習慣であり、その講義の行われる日を「五巻の日」と称して特別重視していたのであるが、道長はこの「捧物」を五月五日に行うためにわざわざこの日だけ講義を二座行ったというのである。もう少し詳しく言えば、法花三十講の第一回目の講義には開経として「無量義経」を講じるので、法花経第十二品たる「提婆達多品」の講義は第十三回目の講義となる。寛弘五年の四月は小の月であるので、一日一回の割合で講義を進めて行けば五月六日が「提婆達多品」の講義の日となってしまう。それを五月五日の講義とすべく五月五日だけ講義を二座に増やしたのである。つまり五月五日に「五巻」たる「提婆達多品」が講ぜられることになったのは道長の人為的操作の結果なのであり少しも「たへな」る現象などではないのである。寛弘五年四月十三日以来土御門邸に里下りしている彰子の女房の一人として土御門邸で催されている法花三十講を見聞していたはずの紫式部がその間の事情に気付かぬはずはない。にもかかわらず、紫式部の詠んだ和歌は、五月五日に「いつゝのまき」が講ぜられることになったことを、人為的現象としてではなく誠に霊妙不可思議の現象として「たへなりや」と感動讃嘆するものになっている。いや、和歌のみではなく詞書までも、主家讃美一色に塗りつぶされていると、従来解されてきた。岡一男氏は、詞書に関し、

『法華経』の五巻にある、釈尊が薪こり水汲んで終身供給走使されて護たといふこの経を「阿私仙よりもこの殿の御ためにや」とは、いみじくも宗教までが結局権勢に奉仕するものであることを道破し得てゐて餘蘊がないが、これは果して紫式部の筆であろうかといふ疑問もある（略）

とまで述べられたのであるが、他の研究者は詞書が紫式部筆であることまで疑うことはないものの、詞書部分が主家讃美一色であると解する点では一致している。その中の一人である南波浩氏は、

五月五日、敢えて「講行二座」ことを以て、五巻の日に合わせた道長の作為を、式部が知らなかったはずはない。にもかかわらず、このような歌を詠んでいるのは、どういうことだろうか。（略）これは明らかに、道長家の法会に対する讃歌である。

と疑問を提出され、

式部がこの盛儀の讃歌を詠んでいるのは、おそらく、一〇〇パーセントの内発的な感動によるものではなく（略）まさに道長家の権勢の栄光を祈念する仏事であることを見通していて、「おほやけ事に言いまぎらわした」ものと思われる。[12]

と結論づけておられるが、では、一体何を「言いまぎらわした」

のかという点については言及しておられない。

日記歌㈢番の詞書に「おほやけごとにいひまぎらはすを」とあるのは少くとも日記歌㈡番の「かゞり火のかげもさはがぬ池水にいく千代すまむのりのひかりぞ」についての発言であることは明らかであるが、㈡番歌は主家讃美の歌であることが明白である。であるならば明白に主家讃美の内容を持つ㈠番歌の方も㈡番歌同様「おほやけごとにいひまぎらは」した歌ではなかろうか、とは南波氏ならずとも誰しも想像するであろうが、では何を一体「いひまぎらは」したのかという点になるとまだ解明されていないのである。

だが、ここでもう一度、㈠番の詞書が本当に主家讃美一色に塗りつぶされているのか否かを、検討してみたく思う。㈠番の詞書は、釈迦が阿私仙から法花経の教授を得る為に如何に供給走使をしたかを語る提婆達多品の次の如き一節をふまえて書かれている。

時に仙人（阿私仙）あり、来りて王（釈迦）に白して言わく「われ、大乗を有てり、妙法蓮華経と名づく。若しわれに違いたまわずば、当にために宣説すべし」と。王は仙の言を聞きて、歓喜し、踊躍し、即ち仙人に随って、須むる所を供給して、菓を採り、水を汲み、薪を拾い、食を設け、乃至、身をもって牀座となせしに、身心は倦ことなかりしなり。(13)

釈迦が阿私仙に奉仕した時には、「木のみをひろ」ったのみではなく、水汲み・薪拾い・食事の用意・身を牀座となすなどの事を行なったと書かれている。ならば、釈迦は阿私仙の為によりも実は道長の為に走使なさったのであろうか、の意を表わすのみならば、「水を汲む」「薪を拾う」「食を設ける」「牀座となる」等の表現も可能であったはずである。事実、「五巻の日」たる当日に行われた「薪の行道」においては、釈迦の走使の様を「法花経を我が得しことは薪こり菜摘み水汲み仕へてぞ得し」と表現した行基の歌が、唱えられたはずである。だが、式部はそれらの多様な表現の中から「木のみをひろう」という表現を選びとっているのであり、その点に注意が必要である。しかも、日記歌㈠番の詞書と歌の両方において、「五巻」が「五月五日」に講ぜられることになったこと即ち多くの数字の中で「五」のみが重なったことが大きく取り上げられているのである。このように述べてくれば、もはや明らかであろうと思うが、実は詞書の中の「木のみ」の部分が「木の実」と「五のみ」の懸詞になっていると思われるのである。

であるから、この部分には二つの意味系列が存在しているわけであって、そのうちの一つは「木の実」の系列つまり道長を讃美する意味系列であり従来解されてきた通りなのであるが、今、重要なのはむしろ「五のみ」の系列の意味である。道長の作為を知らぬはずのない紫式部が、釈迦は道長の為に「五のみ」ひろっておきなさったのであろうか、と言うのは、決して道長讃美ではあり得ない。寛弘五年五月五日に「五巻」を講じる為

にわざわざこの日だけ二座の講義をおこなった道長は「五」という数字を揃えることに執着している。それは、入内以来八年目にしてやっと道長切望の懐妊を遂げた娘彰子が道長家の将来の繁栄を確保すべく男子を無事出産してくれることを切願するが故の執着であった。つまり、道長は数字合せをしてでもこの仏事に霊妙なる効果を添えたかったのである。勿論、紫式部もそのような道長の心情を察していた。だからこそ彼女は道長の意に合わせるべく、「おほやけごと」として詠み上げた歌の冒頭に「たへなるや」の語を用いる事を忘れなかった。だが、紫式部は、「たへなる」効果を期待し得るのは「けふ(五月五日)しもあたりつらむ提婆品(五巻)」という如き遇然の現象の際である、と内心考えていたらしい事は詞書の口調から明らかであろう。いや、紫式部ならずとも当時の人の殆どが、そのように考えていたと思う。

だが仏事に霊妙なる効果を添えようとするあまり、道長は寛弘五年五月五日五巻と「五」ばかり四つも掻き集めてしまったので、「道長の為に(釈迦は)五ばっかり拾っておきなさったのか」と式部が内心で苦笑することになったのである。だがこの内心の苦笑を表に出せば盛大に営まれている「五巻の日」に水を差すことになるので、それを「たへなりや」という讃美の言葉に「言ひまぎらは」したというわけである。

これは、もう一つの見方をすれば、㈠番の詞書の「あし仙よりもこの殿の御ためにや木のみもひろひおかせけむ」という部分が懸詞的に道長への苦笑を含み込んでいることにより、公表不適の部分となっているという事にもなる。これは㈡番の詞書の「おもふことすくなくば……涙ぐまれける」の部分が式部内心の憂悶を吐露してしまっていることにより公表不適の部分となっている事と相通じる現象である。そして、式部自身これらの部分を「言ひまぎらは」したと言っているからには、この部分を公表してしまったのでは少しも「まぎらは」したことにならず自家撞着におちいるのみなので、この部分を有している以上それが公表用として書かれたという気遣いはない。公表する段になればこの部分を省いてしまうはずであるが、そうすると紫式部集の(66)(67)番の詞書に極めて近似したものとなり、次の如く、校異表の形で示すことさえ可能となる。

紫式部集(66)土御門殿にて三十講の五巻五月五日にあたれりしに
日記歌　㈠・・・・・・・・三十講の五巻五月五日なり・・・・・・

紫式部集(67)その夜いけの・・・・・・・・・・かがり火にみあか
日記歌　㈡・・・いけの水のただこのしたにかがり火にみあか

しのひかりあひてひるよりもそこまでさやかなるに・さうぶの
しのひかりあひてひるよりも・・・・さやかなるを見・・・・・

かいまめかしうにほひくれば
・・・・・・・・・・・・・・・・

日記歌㈠㈡と紫式部集(66)(67)は同一の歌を載せていることと、詞書部分が著しく近似していることを見ると、両者の関係の密接なることは明白と思う。

しかし、両者の詞書を詳しく比較すると重要な相違点が二点存在する。その第一は執筆時期の問題である。日記歌㈠番は、「……五月五日なり。けふしもあたりつらむ提婆品をおもふに……とおもひやられて」と現在時制で書かれており、且つ、「五月五日当日」を「けふ」と呼んでいるので、この詞書は寛弘五年五月五日の段階で執筆されたものと推定される。それに対して、紫式部集(66)番では「……五月五日にあたれりしに」と過去時制で書かれており同(67)番では五月五日当夜が「この夜」ではなく「その夜」と表現されていることから、この詞書部分は後になってから執筆されたものと推定されるのである。そして相違点の第二は場所の示し方である。紫式部集(66)番が真先に「土御門殿にて」と場所を明示するのに対し、日記歌の方では法華三十講「五巻の日」が営まれている場所に言及していない。又、日記歌㈡番では「かがり火にみあかしのひかりあ」っている場所を「ただこのしたに」とするのみで、第三者にはそれが具体的にどこであるのかわからない表現になっている。これは、紫式部が世間に公表する為にこの日記歌の文章を書いているのではないことを示す現象と言えよう。故に、「ただこのしたに」の部分は、他に公表する意識でまとめられたと思われる紫式部集の方では削除されてしまうことになった。なお、紫式部集(67)番の「さうぶのかいまめかしうにほひくれば」の部分が日記歌にはないが、これは後に紫式部集をまとめる際に増補されたものと見る他ないように思う。

さて、ここで、日記歌㈡番詞書の「ただこのしたに」とはどこのことかを考えてみたい。「かがり火」がともされていること、紫式部集(67)番には「その夜」と書かれていることから、日記歌㈡番には「五巻の日」の行事も終わって夜になってからの有様が描写されていることが知られるが、当日の夜から翌朝にかけての有様を栄花物語「はつはな」巻は次のように伝えている。

夜になりて、宮（彰子）また御堂におはします。内侍の督の殿などと御物語なるべし。池の篝火に御燈の光ども行き交ひ照り勝り、御覧ぜらるるに、菖蒲の香も今めかしう薫りたり。暁に御堂より局々にまかづる女房達[14]（略）

この記事と、紫式部集(69)番詞書に

やう〳〵明け行くほどに、渡殿に来て、局の下より出づる水を、高欄をおさへてしばし見るたれば（略）

とあるのとを読み合わせれば、紫式部が当夜彰子の御伴をして土御門邸内の「御堂」に渡っていたことは明白であろう。又、「みあかし」とは「御堂」の中の仏前に供されていたものであろうから、この点も合わせて考えれば、「このした」とは「御堂の下」を指していると推定される。

さて、今、注意すべきは、「御堂の下」のことを「このした」

と表現している点である。これは、紫式部が「御堂」にいる段階で少なくとも日記歌㈡番の詞書を書いている証拠であろう。翌朝自分の局へ退出した後、局の中で書いているとすれば、「この下」とは「局の下」の意味になろうが、紫式部の局の「ただこのした」には「池」はなく「遣水」が流れているのみであることが紫式部集(69)番詞書により明らかである。この現象は、紫式部集(69)番詞書に、「（紫式部の局がある）渡殿に来て」とあって「渡殿に行きて」とはないことから、それが紫式部の局の中で書きとめられたものと推定されるのと対照的な現象である。かって、萩谷朴氏は、

紫式部日記も紫式部が日々記録してゐた日記原体より発展したものであり、日記歌も亦直接その日記原体より歌の部分のみを抜萃したものであると考へるのである。（略）そして、紫式部自身が記録した日記原体とは何であるかといふと、それは男子公卿の用ゐた具注暦に他ならないと考へる。

と述べられたのであるが、紫式部が自分の「具注暦」を「御堂」の中へまで持ち込んでいたとは考え難く、恐らく、持ち運びがもっと容易なもの即ち懐紙もしくは小冊子に書きつけたものと見る方が実際的であろう。さて、少くとも日記歌㈡番詞書が「御堂」の中で書きとめられているということは、遅くとも翌暁自分の局に帰る以前の段階で書きとめられたものということになる。女房達が自分の局に帰ることを許された時刻が何故「やうやう明け行く程」という現代から見れば実に中途半端な時刻であったのかと言えば、当時は日付け上大体「寅の刻」以後を翌日と考えていたらしい事と関連するのであり、「やう〳〵明け行く程」というのは五月五日が終わり五月六日が始まる頃の時間なのであって、この場合女房達はいわば五月五日の勤務が明けて局に帰ることを許されたわけである。であるから、日記歌㈡番の詞書は、勿論歌も含めて、五月五日当夜のうちに書きとめられたことになる。そして、日記歌㈢番詞書に「おほやけごとにいひまぎらはすを」とあるその「いひまぎらは」した内容が同㈠㈡番詞書の中に示されているという密接な関係を思えば、この日記歌㈢番の歌や詞書も又、五月五日当夜に書きとめられたものであると推定してよいであろう。

さて、日記歌㈢番と紫式部集(68)番は同じ「すめる池の」の歌を載せているが、詞書部分は「おほやけごとにいひまぎらはすを」の部分を全く共通にしているのに、それ以下の部分の書き方は大きく異なっている。日記歌㈢番詞書が「大納言君」と詠作者名をズバリ明示するのみで誠に簡潔であるのに対し、紫式部集(68)番詞書は詠作者名を明示せず「向ひたまへる人は」とのみ表現し、続いて、「さしも思ふこともし給ふまじき容貌・有様・齢（よわひ）のほどを、いたう心深げに思ひ乱れて」と実に詳しい説明的な描写をしている。この相違の理由は、紫式部は、自分が「おほやけごとにいひまぎらは」しているのにもかかわらず「憂き我が身かな」と私的な憂さを表明した大納言の君を批判

しているのであることに注意すれば、明らかと思う。つまり、他に見せるつもりのない日記歌では詠作者を「大納言君」と名指しできたのであるが、他に公表する意識でまとめられた紫式部集では名指ししてしまうわけにいかず「向ひ給へる人」と詠作者を暈した結果、詠作者の有様等を他者にもわかるよう説明的に詳述することとなったわけである。

日記歌㈠㈡番の歌自体は「おほやけごと」として公表することを前提に作詠され、事実㈠番歌は恐らく「五巻の日」の法要の席で、㈡番歌は当日の夜「御堂」において彰子の御前で披露されていると思う（大納言君の「すめる池の」の歌も式部の「かがり火の」の歌に対する「返し」とはされていないので、彰子の御前で他の女房らの歌と同様披露されたものなのであろう）が、紫式部が自分の詠たる㈠㈡番歌や大納言君の詠たる㈢番歌に日記歌㈠㈡㈢番の詞書を付して当日書きとめたのは、自分自身の手控え的なものとして書きとめたのであって、それをこのままの形で公表するつもりなどなかったものと思われる。公表する場合には紫式部が如何に慎重に手を加えるかは、今まで紫式部集の詞書との比較を行なって来た部分から明らかであろう。

四

次に、「日記歌」㈣㈤番の検討に移りたい。

五月五日、もろともにながめあかして、あかうなればいりぬ。いとながきねをつゝみて、さしいでたまへり。小少将君

㈣なべて世のうきになかるゝあやめ草けふまでかゝるねはいかゞみる

返し

㈤なにごととあやめはわかでけふも猶たもとにあまるねこそたえせね

歌の中の「あやめ草けふまでかゝる」「けふも猶」の語によって、㈣番と㈤番が所謂「六日のあやめ」をめぐっての贈答である事は明らかであり、これら二首が詠まれたのは五月六日であったはずである。㈣番詞書に「五月五日」とあるのは誤りであると言うべきであろう。又、「もろともにながめあかして」とある部分も不審である。「ながめあかす」とは「ながめ」た状態で「夜をあかす」意味であるが、紫式部集㈥番詞書によれば、紫式部や小少将君は「やう〳〵明け行くほど（栄花物語当該項に「暁」とある）」に「御堂」から退出して来て後「ながめ」初めているのであって、決して「夜」の間から「ながめ」て「夜」を明かしたわけではないので、「ながめあかして」という表現は実は成立し得ないのである。

更に、日記歌㈣番の詞書では「なべて世の」の詠作者を「小少将君」と明示しているが、これも問題である。まず、紫式部集の㈥番から㈦番までを引用する。

やう〳〵明け行くほどに、渡殿に来て、局の下より出づる水を、高欄をおさへて、しばし見ゐたれば、空の気色

春秋の霞にも霧にも劣らぬころほひなり。小少将のすみの格子をうちたたきたれば、放ちておしおろしたまへり。もろともにおり居て、ながめゐたり。

(69)影見ても憂きわが涙落ちそひてかごとがましき滝のおとかな

返し

(70)独り居て涙ぐみける水の音にうき添はるらん影やいづれぞ

明かうなれば入りぬ。長き根を包みて

(71)なべて世の憂きになかるるあやめ草今日までかかるねはいかがみる

返し

(72)何事とあやめは分かで今日もなほ袂にあまるねこそ絶えせね

(69)番を紫式部作、(70)番を小少将の作とする点では諸説一致しているけれど、(71)番の作者を誰と見るかについては説が分かれている。従来、日記歌(四)番詞書に「なべて世の」の作者を「小少将君」と明示していることを根拠に(71)番作者を「小少将君」とする説が多かったが、今井源衛[16]・木船重昭[17]の両氏は(71)番作者を紫式部としておられる。(71)番詞書に作者が明示されていないことからくる混乱であるが、実は、木船氏も指摘しておられるように、「長き根を包みて」という詞書表現が何よりも雄弁にこの歌の作者が紫式部たることを語っているのである。というのは、紫式部日記や紫式部集の中で「小少将君」に言及する時、それが公的場面の描写でなく私的場面の描写である限り必ず敬語表現を用いているからである。(71)番のすぐ前にある(69)番詞書に「小少将のすみの格子をうちたたきたれば、放ちておしおろしたまへり」と敬語表現が用いられていることを見逃してはなるまい。(71)番歌が小少将君の作であるなら「長き根を包みたまひて」と書かれるはずである。それがそうなっていないのは(71)番歌が紫式部の作であるからに他ならないのである。この(71)番詞書を疑う理由は、紫式部集の詞書のあり方から見ても、全く存在しないと思われるので、日記歌(四)番詞書に「さしいでたまへり。小少将君」とある箇所をむしろ疑問とすべきであろうと思う。

右に述べた如く「五月五日」「もろともにながめあかして」「さしいでたまへり。小少将君」の部分はそれぞれ問題を有しており、紫式部筆であるとは到底思われないが、日記歌(四)番詞書からその部分を除くと、「あかうなればいりぬ。いとながきねをつゝみて」となり、紫式部集(71)番詞書と殆ど完全に一致してしまう。これも、日記歌と紫式部集の関係の密接さを証明する現象であろう。

さて、では何故、日記歌(四)番の詞書は現在の如き形に増補されたのであろうか。これは、実は、古本系紫式部集の本文[18]中に、

土御門院にて、やり水のうへなるわたどののすのこにゐて、かうらんにおしかかりてみるに

かげみてもうきわが涙おちそひてかごとがましきたきの音哉

という部分が存在することと関連すると思う。この「かげみても」の歌は紫式部集に(69)番歌として収められており、その詞書から寛弘五年五月六日早朝に作詠されたことは明らかであるが、

今注意すべきは、右に引用した詞書中の「土御門院」という用語である。この語について、岡一男氏は「土御門院の呼称が行成の『権記』などに散見するところを見ると、これは当時の男子の用語で」あると述べられた。「男子の用語」であるとまで断定する勇気は私には今のところ無いが、少くとも紫式部の用語ではなさそうである。というのは、紫式部は紫式部集及び紫式部日記において「土御門殿」という呼称を用いているからである。又、紫式部集においては(66)番の「たへなりや」の歌から(72)番の「何事と」の歌までが明らかに一連の歌群を構成しているのに、何故、古本系紫式部集の本文には「かげみても」の歌のみが収載されているのかも不審である。少くとも、「かげみても」の歌への答歌たる「独り居て」の歌は、その作者が紫式部の無二の親友たる小少将君であることを考え合わせればなおさら、紫式部が切り落とすことは考えられない。又、詞書部分に小少将君への言及が見られず独詠歌の体裁をとっているのも奇妙である。更に、「かげみても」の歌が作られた場所についても「わたどののすのこ」の上ということになっていて、紫式部集(69)番詞書に「局の下より出づる水」のほとりとされているのとくいちがっているが、「(やり水に映る)かげみてもうきわが涙(やり水に)おちそひて」という歌いぶりから判断すれば、紫式部が「やり水」のほとりで作詠していると見るのが自然であろう。以上の如く、古本系紫式部集の「かげみても」の詞書は紫式部筆のままであるとは到底考え難い。

恐らく、古本系紫式部集が一応成立した後に別人の手によって書き加えられたものであろうと推定されるが、その書き加えられた時期は、遅くとも古本系紫式部集の巻末に日記歌(一)～(五)が付載される以前であったと思われる。何故なら、日記歌には寛弘五年五月五日から翌六日にかけて詠まれた一連の歌群の中で、「かげみても」と「独り居て」の贈答部分のみが載っていないからである。この理由は「日記歌の原拠」にこの部分が欠けていたからでは決してない。

ここで、日記歌(四)番詞書の「もろともに」「ながめ」「あかして」の部分が、紫式部集(69)番詞書の「やう〳〵明け行くほどに……もろともにおり居て、ながめゐたり」の部分と用語の点で関連を有していることに注意が必要である。つまり、日記歌(四)番の詞書の中の増補されたと見られる部分は、紫式部集(69)番の如き詞書を参照して書かれているらしいのである。日記歌(四)番詞書で「なべて世の」の歌の作者を「小少将君」としているのは誤りであろうことは前述したが、では何故ここに作者として他の人ではなく「小少将君」の名前が登場しているのかと言えば、紫式部集(69)番詞書中に「小少将」の名が登場していることと関連しているであろう。これは、日記歌の編者が紫式部集(69)番詞書の如きものを見ている証拠と思う。恐らく、これは、「日記歌の原拠」の中には「かげみても」と「独り居て」の贈答部分も含まれていたことを示すものと思う。前述の如く、日記歌の詞書と紫式部集詞書は、公表不適と思われる部分や後人

の手が加えられたと思われる部分を除くと、極めて近似度の高いものであった。故に、恐らく、「日記歌の原拠」にも紫式部集(69)(70)番の文面と殆ど変わらない形で載っていたものと推定される。

ならば、現在の日記歌に「かげみても」と「独り居て」の贈答部分が載っていないのは、日記歌編者によって省かれたからであるということになるが、何故省かれたのかと言えば、それは古本系紫式部集の本文部分に「かげみても」の歌が既に載っていたからであろうと推定されるのである。では何故「独り居て」の歌まで省いたかと言えば、これが「かげみても」の歌に対する答歌であることによる。答歌のみ載せようとしても結局何らかの形で贈歌に言及せざるを得ず、そうすると古本系紫式部集の本文と贈歌の部分が重複するので、贈歌が省かれたそのあおりを食って答歌も省かれたものと思われる。答歌は紫式部の作ではないので敢えて載せるまでもあるまいと判断されたのでもあろう。

そして、この贈答歌二首を省いてしまったが為に、「なべて世の」の歌の詞書に大幅に手を加えざるを得なくなったわけである。その結果増補された詞書が前述の如く誤りを含むものになってしまったものと思われる。

五

以上の考察の結果をふまえて「日記歌の原拠」の姿を推定すると、日記歌(一)(二)(三)番と紫式部集(69)(70)(71)(72)番を連結した如きものと見て大過なさそうに思う。「日記歌の原拠」には或いはこの他にも歌があったかも知れぬが、現存資料からはその点の判定は不可能である。

ところで、私は、日記歌(一)(二)(三)番は寛弘五年五月五日の詠作歌に詞書を付してその日のうちに書きとめた手控え的なものであろうと推定した。ならば、翌六日に詠作された「かげみても」「独り居て」「なべて世の」「何事と」の四首についても、同様にその日のうちに詞書とともに書きとめられた可能性は大きい。詞書部分もその推定を妨げない。仮りに「日記歌の原拠」にこの他にも歌が載せられていたとしても、それらが詠作当日に手控え的に記されたものであろうという点は恐らく変わるまい。

「その日のうちに書きとめる」というのは「日にしるす」[19]という「日記」の原義にまさに適合したあり方である。故に「日記歌」という標題は、本来「その日その日に書きしるされた歌」という意味に解すべきものと思う。だが、それが「紫式部日記に載っている歌」の意に誤解され(六)〜(十六)番の部分が付け加えられてしまったものであろう。「日記歌の原拠」が、「日にしるす」という性格を満たしている以上は、それを「日記」と呼んだところで決して誤りでもあるまいが、その「日記」なるものを、現存紫式部日記の首欠以前の姿なるものに結びつけることは許されまい。現存紫式部日記に関して秋山虔氏が、

消息文以前の日記的部分が、その内容の頃の執筆でないことは、たとえば「かばかりのことの、うち思ひいでらるるもあり、そのをりはおかしきことの、過ぎぬれば忘るるもあるはいかなるぞ」とか、「扇どものをかしきを、その頃は人々持たり」とかいう顕著な筆致からも容易に想像される。

と述べておられることを想起すれば事足りよう。又、明らかに読者を意識して書かれている現存紫式部日記と、公表するつもりなく公表不適の部分まで含み込んで手控え的に書かれている「日記歌の原拠」とは、執筆姿勢の点でも大きな差があるように思う。又、仮りに日記歌冒頭の五首が現存紫式部日記の首欠以前の姿から抄出されたとすれば、日記歌(四)番詞書部分に誤りが含まれている理由を説明しがたいように思う。

日記歌冒頭五首は、前述の如く、紫式部集と密接な関連を有するものであって、詠歌メモ的色彩の濃いものである。この日記歌冒頭五首を根拠にして現存紫式部日記首欠説を唱えることは恐らく無理であろうと思われる。

現存紫式部日記が首欠であるか否かについてはまだ論ずべき問題は多いが、それは他の機会に譲りたい。上来の考察にも多々失考があろうかと思う。大方の御教示を切に乞う次第である。

注

(1) 小沢正夫氏「紫式部日記考——日記歌による日記の原形推定は不可能なるか——」(国語と国文学　昭和十一年十一月号)

(2) 池田亀鑑氏「紫式部日記歌と家集について」(学苑一五三号　昭28)

(3) 池田亀鑑・秋山虔両氏校注、日本古典文学大系『紫式部日記』解説(岩波書店　昭33)以下、秋山説はこれに拠る。

(4) 萩谷朴氏「紫式部日記絵巻物の考察より日記本文の残欠非残欠説の批判並に日記歌原体の推測に及ぶ」(二松第二八号　論纂篇第三輯　昭18・7)以下に引用する萩谷説はこれに拠る。

(5) 南波浩氏著『紫式部集の研究』伝本研究篇　第四章「古本系巻末『日記歌』と『紫式部日記歌』との性格」(笠間書院　昭47・9)

(6) 原田敦子氏「中宮土御門殿滞在記の想定——紫式部日記の形成過程——」(国語と国文学　昭和五三年一月号)

(7) 岡一男氏著『源氏物語の基礎的研究』第二部三(4)『紫式部日記』と『日記歌』との関係(東京堂出版　昭29)以下に引用する岡説は全てこの部分に拠る。

(8) 石村正二氏「紫式部日記の原形と現存形態(上)——その首欠部分について——」(国語　第四巻一号　昭30・8)

(9) 日記歌の本文は、笠間影印叢刊『陽明文庫蔵　紫式部集』(笠間書院　昭47)付載のものによる。但し、用字は私

に改めた部分がある。

(10) 以下、単に「紫式部集」とある場合は、定家本系に属する実践女子大学本をもとに南波浩氏が本文校定された岩波文庫「紫式部集」（岩波書店　昭48）を指すものとする。

(11) 大日本古記録「御堂関白記　上」（岩波書店　昭27）に拠る。

(12) 南波浩氏著『紫式部集全評釈』（笠間書院　昭58）376頁

(13) 坂本幸男・岩本裕両氏訳注、岩波文庫『法花経　中』（岩波書店　昭51改版）204頁

(14) 松村博司・山中裕両氏校注、日本古典文学大系『栄花物語　上』（岩波書店・昭39）257頁

(15) 斎藤国治氏「日本上代の日始の時刻について」（古代文化　昭和五二年二月号）

(16) 今井源衛氏著　人物叢書『紫式部』（吉川弘文館　昭41）169頁

(17) 木船重昭氏著『紫式部集の解釈と論考』論考編「定家自筆本系紫式部集の詞書」（笠間書院　昭56）

(18) 注(9)に掲げた『陽明文庫蔵　紫式部集』に拠る。

(19) 諸橋轍次著『大漢和辞典　巻五』「日記」の項（大修館書店　昭32）

※ 猶、拙稿「寛弘五年彰子懐妊中参内への経緯をめぐって――紫式部日記首欠説存疑――」（平安文学研究　第五九輯昭53・6）は本稿と姉妹関係にある。併せてお読み戴ければ幸いである。